



小池 光選

そばに来て鳴かないでくれ蟬たちよもうすぐバスに乗らねばならぬ 浜松市 藤田 亜耶

【評】蟬の声にはふしぎな力があって、ふと立ち止まって聞きたくなる。どうか近くで鳴かないで。もうすぐバスが来てしまうから。しかし、バスは無慈悲にも来るのである。

離婚した吾にと母が買いくれし墓地の草抜く七月の風 古河市 池沢 悦子

【評】離婚した娘のために、将来彼女が入るべきお墓を、母は用意しておいてくれたのだ。この思いやりと心配には、こころ打たれるものがある。親心の極みだろう。

そこかしこハエ取り紙がぶら下がり髪にくっつく始末におえぬ 常陸太田市 岡田 広子

【評】むかしどこの家にもあって、いまどこにもなくなったものの一つに、ハエ取り紙というものがある。髪につくと大変。懐かしい。

「生きてるつて実感するなあ」風をよぐ青田みながら介護士の娘言ふ 鹿嶋市 大熊佳世子

パソコンもスマホもなかった教室でたひたすらに先生見つめた 宮城県 松本美由紀

柿の実を頬張りながら土手の道帰るくるなり小さなわれが 仙台市 千葉 幸平

天の川見上げる二人は共白髪嘗ての不良と不良少女よ 四街道市 須崎 輝男

亡き夫の手作りしたる本棚の「日本の歴史」は生きてるべし ふじみ野市 小林 久枝

胸の上にナースコートを握りしめ母は逝きけり押す事もせず 龍ヶ崎市 前田のぶ子

文通で錦帯橋の絵葉書をくれた男児もきつと八十路だ 横浜市 桃井 恒和

栗木 京子選

米や味噌のちの糧のあれこれに付け足して買ふ線香花火 安中市 田口 明子

【評】暑い日々にも食料品の買い物は欠かせない。まさに「いのちの糧」なのだから。そこに線香花火を付け足すことで日常にゆとりや彩りが生まれる。結句が効いている。

安青錦、羽生、山下、怪我ありてわれは離婚で強くなりけり 名古屋 山守 美紀

【評】七月の名古屋場所で優勝した安青錦、フィギュアスケートの羽生結弦、柔道の山下泰裕。どの人も怪我を克服した。作者も試練を経て前進したのだ。下句の展開が見事。

「これいい色」誰かが言へば誇らしく団十郎咲く夏の朝かな 東京都 田上 博文

【評】朝顔の団十郎。歌舞伎の演目「暫」の装束の海老茶色に由来する名とされる。「誇らしく」に名優への畏敬の念がうかがえる。

疲れると持病のめまいすつと出で「歳忘るな」と忠告し去る 八街市 名取 照子

朽ちかけし卒塔婆の裏のかまきりに触るれば又も鎌を向けた 新発田市 桐沢 茂

ロキソニンでべールをかける痛みからほんのり見える夕暮れの空 川崎市 芹沢 詩子

槍ヶ岳登頂記念とシャボン玉飛ばすもたちまち霧の彼方へ 神栖市 山上ふみ子

もう姉とゆく旅はなく似ていると言われることも悪くはないか 東大阪市 池田 敏子

一粒の鮎さえ他の子に分けようと飛び跳ね走るネパールの子は 東京都 小林 久子

松笠を天橋立に拾ひたりその種子そだて三十年の松に 神奈川県 角田 兼勝